of Biological Psychiatry, Prague, Czech Republic, 5.29-6.2(31), 2011.poster

13) Takahashi H, Iwase M, Yasuda Y, Yamamori H, Ohi K, Fukumoto M, Canuet L, Ishii R, Kazui H, Hashimoto R, Takeda M. Relationship of prepulse inhibition to opersonality dimensions in Japanese patients with wchizophrenia. 10th World Congress of Biological Psychiatry, Prague, Czech Republic, 5.29-6.2(31), 2011. poster

14) Tagami S, Okochi M, Yanagida K, Kodama T, Ikeuchi T, Morihara T, Hashimoto R, Tanimukai H, Kazui H, Tanaka T, Kudo T, Takeda M. Decrease in major amyloid beta species may trigger amyloidogenesis in vivo. 10th World Congress of Biological Psychiatry, Prague, Czech Republic, 5.29-6.2(1), 2011. Poster

15) 松浦由加子、藤野陽生、橋本亮太、井村修、統合失調症患者の姿勢不安定性とその要因の検討、2011年度日本リハビリテイション心理学会学術大会、大阪、12.9, 2011. 口頭

16) 安田由華、橋本亮太、新型インフルエンザ罹患後にKleine-Levin症候群を発症した一例へのリスペリドンの効果、第52回日本児童青年精神医学会、徳島、11.12(12), 2011. ポスター

17) 水田直樹、安田由華、木田香織、橋本亮太、武田雅俊、重症神経性食思不振症女児の構造化治療の一症例、第52回日本児童青年精神医学会、徳島、11.12(11), 2011. ポスター

18) 岩瀬真生、疇地道代、池澤浩二、石井良平、高橋秀俊、中鉢貴行、Canuet Leonides、栗本龍、青木保典、池田俊一郎、数井裕光、福本素由己、大井一高、山森英長、安田由華、橋本亮太、武田雅俊、Stermberg課題中の前頭部血流変化のNIRSによる測定、第41回日本臨床神経生理学会学術大会、静岡、11.10-12(12)、2011、ポスター

19) 大井一高、橋本亮太、安田由華、福本素由己、山森英長、紙野晃人、森原剛史、岩瀬真生、数井裕光、武田雅俊、KCNH2遺伝子は認知機能及び統合失調症のリスクに関連する、第21回日本臨床精神神経薬理学会・第41回日本神経精神薬理学会合同年会、東京、10.27-29(27), 2011. ポスター

20) 橋本亮太、大井一高、安田由華、福本素由己、山森英長、高橋秀俊、岩瀬真生、大河内智、数井裕光、斉藤治、巽雅彦、岩田仲生、尾崎紀夫、上島国利、功刀浩、武田雅俊、RELA 遺伝子は統合失調症のリスク及びプレパルス抑制の障害に関連する、第21回日本臨床精神神経薬理学会・第41回日本神経精神薬理学会合同年会、東京、10.27-29(27), 2011. ポスター

21) 橋本亮太、山森英長、安田由華、福本素己、大井一高、梅田知美、岡田武也、住吉太幹、武田雅俊、阪大病院における14症例の治療抵抗性統合失調症患者へのクロザピンの使用経験：認知機能障害への効果、第21回日本臨床精神神経薬理学会・第41回日本神経精神薬理学会合同年会、東京、10.27-29(28), 2011. ポスター

22) 安田由華、橋本亮太、山森英長、福本素己、大井一高、梅田知美、岡田武也、武田雅俊、阪大病院における14症例の治療抵抗性統合失調症患者へのクロザピンの使用経験：麻痺性イレウス・便秘について、第21回日本臨床精神神経薬理学会・第41回日本神経精神薬理学会合同年会、東京、10.27-29(28), 2011. ポスター

23) 安田由華、橋本亮太、山森英長、福本素己、大井一高、梅田知美、岡田武也、武田雅俊阪大病院における14症例の治療抵抗性統合失調症患者へのクロザピンの使用経験：起立性低血圧、第21回日本臨床精神神経薬理学会・第41回日本神経精神薬理学会合同年会、東京、10.27-29(28), 2011. ポスター

24) 橋本亮太、山森英長、安田由華、福本素己、大井一高、梅田知美、阪大病院における14症例の治療抵抗性統合失調症患者へのクロザピンの使用経験：前薬からの切り替えについて、第21回日本臨床精神神経薬理学会・第41回日本神経精神薬理学会合同年会、東京、10.27-29(27), 2011. ポスター

25) 山森英長、橋本亮太、安田由華、福本素由己、大井一高、梅田知美、岡田武也、武田雅俊、阪大病院における14症例の治療抵抗性統合失調症患者へのロザピンの使用経験：てんかん発作、痙攣について、第21回日本臨床精神神経薬理学会・第41回日本神経精神薬理学会合同年会、東京、10.27-29(28), 2011. ポスター

26) 山森英長、橋本亮太、安田由華、福本素由己、

大井一高、梅田知美、岡田武也、武田雅俊、阪大病院における14症例の治療抵抗性統合失調症患者へのロザピンの使用経験：肝機能異常について、第21回日本臨床精神神経薬理学会・第41回日本神経精神薬理学会合同年会、東京、10.27-29(28), 2011. ポスター

27) 福本素由己 、橋本亮太、山森英長、安田由華、大井一高、梅田知美、岡田武也、武田雅俊、阪大病院における14症例の治療抵抗性統合失調症患者へのロザピンの使用経験：好中球減少症について、第21回日本臨床精神神経薬理学会・第41回日本神経精神薬理学会合同年会、東京、10.27-29(28), 2011. ポスター

28) 橋本亮太、山森英長、安田由華、福本素己、大井一高、梅田知美、岡田武也、武田雅俊、阪大病院における14症例の治療抵抗性統合失調症患者へのクロザピンの使用経験：治療効果について第21回日本臨床精神神経薬理学会・第41回日本神経精神薬理学会合同年会、東京、10.27-29(27), 2011. ポスター

29) 福本素由己、橋本亮太、山森英長、安田由華、大井一高、梅田知美、岡田武也、武田雅俊、阪大病院における14症例の治療抵抗性統合失調症患者へのロザピンの使用経験：多飲水について、第21回日本臨床精神神経薬理学会・第41回日本神経精神薬理学会合同年会、東京、10.27-29(28), 2011. ポスター

30) 橋本亮太、山森英長、安田由華、福本素己、大井一高、梅田知美、岡田武也、武田雅俊、阪大病院における14症例の治療抵抗性統合失調症患者へのクロザピンの使用経験：適応判断について第21回日本臨床精神神経薬理学会・第41回日本神経精神薬理学会合同年会、東京、10.27-29(28), 2011. ポスター

31) 大井一高、橋本亮太、山森英長、安田由華、福本素由己、梅田知美、岡田武也、武田雅俊、阪大病院における14症例の治療抵抗性統合失調症患者へのクロザピンの使用経験：クロザピン使用における糖代謝異常について、第21回日本臨床精神神経薬理学会・第41回日本神経精神薬理学会合同年会、東京、10.27-29(27), 2011. ポスター

32) 橋本亮太、山森英長、安田由華、福本素由己、大井一高、梅田知美、岡田武也、武田雅俊、阪大病院における14症例の治療抵抗性統合失調症患者へのクロザピンの使用経験、第21回日本臨床精神神経薬理学会・第41回日本神経精神薬理学会合同年会、東京、10.27-29(27), 2011. 口頭

33) Hashimoto R, Ohi K, Yasuda Y, Fukumoto M, Yamamori H, Kamino K, Morihara T, Iwase M, Kazui K, Takeda M. KCNH2 Gene is associated with Neurocognition and the Risk for Schizophrenia. 第107回日本精神神経学会学術総会、東京、10.26-27(27), 2011. ポスター

34) Ohi K, Hashimoto R, Yasuda Y, Iwase M, Kazui H, Fukumoto M, Yamamori H, Takeda M. The Chitinase 3-Like 1 gene is associated with the gene expression, the serum YKL-40 and the personality trait in schizophrenia. 第107回日本精神神経学会学術総会、東京、10.26-27(27), 2011. ポスター

35) 橋本亮太、安田由華、大井一高、福本素由己、山森英長、梅田知美、岡田武也、高雄啓三、小林克典、楯林義孝、宮川剛、貝淵弘三、岩田仲生、尾崎紀夫、武田雅俊、統合失調症の候補遺伝子の精神生物学、第54回日本神経化学会大会、石川、9.26-28(26), 2011. シンポジウム、講演

36) 橋本亮太、大井一高、安田由華、福本素由己、山森英長、梅田知美、岡田武也、岩瀬真生、数井裕光、武田雅俊、ヒト脳表現型と分子を結ぶ新しいアプローチ：ヒト脳表現型コンソーシアム、第54回日本神経化学会大会、石川、9.26-28(26), 2011. シンポジウム、講演

37) 山路國弘、橋本亮太、大井一高、福本素由乙、安田由華、山森英長、統合失調症入院プログラムによってブロナンセリンが最も有効であることが客観的に示された一例、DS フォーラム2011、神戸、9.18.2011. ポスター

38) 橋本亮太、大井一高、安田由華、福本素由己、山森英長、高橋秀俊、岩瀬真生、大河内智、数井裕光、斉藤治、巽雅彦、岩田仲生、尾崎紀夫、上島国利、功刀浩、武田雅俊、RELA 遺伝子は統合失調症とプレパルス抑制と関連する、第34回日本神経科学大会こころの脳科学、横浜、9.14-17(17), 2011. ポスター

39) 橋本亮太、大井一高、安田由華、福本素由己、山森英長、武田雅俊、ヒトにおける脳表現型の分子機構の解明：ヒト脳表現型コンソーシア

ムについて、包括脳ネットワーク 2011 年度夏のワークショップ、神戸、8.21-24(23), 2011. ポスター

40) Ohi K, Hashimoto R, Yasuda Y, Fukumoto M, Yamamori H, Kamino K, Morihara T, Iwase M, Kazui H, Takeda M. The KCNH2 Gene Is Associated with Neurocognition and the Risk of Schizophrenia. 包括脳ネットワーク 2011 年度夏のワークショップ、神戸、8.21-24(23), 2011. ポスター

41) Branko Aleksic, Kushima I, Hashimoto R, Ohi K, Ikeda M, Yoshimia A, Nakamuraa Y, Ito Y, Okochi T, Fukuo Y, Yasuda Y, Fukumoto M, Yamamori H, Ujike H, Suzuki M, Inada T, Takeda M, Kaibuchi K, Iwata N, Ozaki N. Analysis of the VAV3 as new candidate gene for schizophrenia: evidences from voxel based morphometry and mutation analysis. 包括脳ネットワーク 2011 年度夏のワークショップ、神戸、8.21-24(23), 2011. ポスター

42) 水田直樹、安田由華、木田香織、橋本亮太、武田雅俊、重症神経性食思不振症女児の構造化治療の一症例、第 109 回近畿精神神経学会、滋賀、8.6, 2011. 口頭

43) Hashimoto R, Ohi K, Yasuda Y, Fukumoto M, Yamamori H, Kamino K, Morihara T, Iwase M, Kazui K, Takeda M. KCNH2 Gene is associated with Neurocognition and Risk for Schizophrenia. 第 6 回日本統合失調症学会、札幌、7.18-19(18), 2011. ポスター

44) 安田由華、橋本亮太、山森英長、大井一高、福本素由己、毛利育子、谷池雅子、武田雅俊、統合失調症と広汎性発達障害におけるリンパ芽球を用いた mRNA 発現定量解析についての比較検討、第 6 回日本統合失調症学会、札幌、7.18-19(19), 2011. ポスター

45) Ohi K, Hashimoto R, Yasuda Y, Iwase M, Kazui H, Fukumoto M, Yamamori H, Takeda M. The Chitinase 3-Like 1 gene is associated with the gene expression, the serum YKL-40 and the personality trait. 第 6 回日本統合失調症学会、札幌、7.18-19(18), 2011. ポスター

46) 新井誠、市川智恵、宮下光弘、新井麻友美、小幡奈々子、野原泉、杉岡大輝、岡崎祐士、吉川武男、有波忠雄、久島周、尾崎紀夫、福本素由己、橋本亮太、小池進介、滝沢龍、笠井清登、宮田敏男、湯澤公子、糸川昌成、統合失調症におけるカルボニルストレス回避機構の研究、第 6 回日本統合失調症学会、札幌、7.18-19(18), 2011. ポスター

47) 橋本亮太、大井一高、安田由華、福本素由己、山森英長、梅田知美、岩瀬真生、数井裕光、武田雅俊、統合失調症の中間表現型研究の最前線 -The front line of intermediate phenotype study in schizophrenia-、第 33 回日本生物学的精神医学会、東京、5.21-22(22), 2011. シンポジウム、講演

48) 新井誠、市川智恵、宮下光弘、新井麻友美、小幡奈々子、野原泉、岡崎祐士、吉川武男、有波忠雄、久島周、尾崎紀夫、福本素由己、橋本亮太、小池進介、滝沢龍、笠井清登、宮田敏男、渡邉琢夫、山本博、糸川昌成、カルボニルストレス性統合失調症の病態に関する研究 -Research on pathophysiology of the schizophrenia associated with idiopathic ccarbonyl stress-、第 33 回日本生物学的精神医学会、東京、5.21-22(22), 2011. シンポジウム、講演

49) 安田由華、橋本亮太、大井一高、福本素己、梅田矢野知美、山森英長、大河内智、岩瀬真生、数井裕光、岩田仲生、武田雅俊、遺伝子の遺伝子多型とシゾイドパーソナリティ特性の関連 -Association of the ZNF804A genotype with schizotypal personality trait-、第 33 回日本生物学的精神医学会、東京、5.21-22(22), 2011. 口頭

50) 山森英長、橋本亮太、大井一高、安田由華、福本素由己、梅田知美、岩瀬真生、数井裕光、伊藤彰、武田雅俊、Schizophrenia associated promoter variant in the Chitinase 3-Like 1 gene is associated with serum YKL-40 level and personality trait. 第 33 回日本生物学的精神医学会、東京、5.21-22(22), 2011. ポスター

51) 大井一高、橋本亮太、安田由華、福本素由己、山森英長、梅田知美、根本清貴、大西隆、岩瀬真生、数井裕光、武田雅俊、NRGN 遺伝子における統合失調症全ゲノム関連解析からの遺伝子多型と関連する脳灰白質の変化：VBM 研究 -Gray matter alteration related to the

genome wide supported schizophrenia variant in the NRGN gene: A voxel-based morphometry study. 第33回日本生物学的精神医学会、東京、5.21-22(22), 2011. ポスター

52) 福本素由己、橋本亮太、安田由華、大井一高、山森英長、岩瀬真生、数井裕光、武田雅俊、統合失調症における Remission の研究-Study of Remission in Schizophrenia、第33回日本生物学的精神医学会、東京、5.21-22(22), 2011. ポスター

53) 岡田武也、橋本亮太、山森英長、梅田知美、安田由華、大井一高、福本素由己、富田博秋、武田雅俊、統合失調症リスク遺伝子 ZNF804A の新規 mRNA variant の検討 - A study on a novel mRNA variant of the schizophrenia risk gene ZNF804A、第33回日本生物学的精神医学会、東京、5.21-22(22), 2011.ポスター

54) 高橋秀俊、岩瀬真生、安田由華、山森英長、大井一高、福本素由己、Canuet Leonides、石井良平、数井裕光、橋本亮太、武田雅俊、統合失調症患者における聴覚性驚愕反射のプレパルス・インヒビションと personality dimension との関連-Prepulse inhibition and its relationshiop to personality dimensions in patients with schizophrenia、第33回日本生物学的精神医学会、東京、5.21-22(22), 2011. ポスター

55) 太田深秀、石川正憲、佐藤典子、中田安浩、根本清隆、大西隆、守口善也、橋本亮太、功刀浩、Voxel based morphometry を用いた統合失調症と健常人の判別分析-Discriminant analysis between schizophrenia patients and healthy subjects using MRI、第33回日本生物学的精神医学会、東京、5.21-22(22), 2011. ポスター

56) 中江文、橋本亮太、奥知子、酒井規広、柴田政彦、眞下節、痛みとは何か～統合失調症患者研究を通した痛みの考察～、日本麻酔科学会第58回学術集会、神戸、5.19-21(21).2011. 口頭

G. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

1. 特許取得

該当なし。

2. 実用新案登録

該当なし。

3. その他

該当なし。

平成２３年度厚生科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）
分担研究報告書

超細密染色体分析から捉え直すヒト発達障害研究

分担研究課題：年齢依存性てんかん性脳症の遺伝型と臨床型の関連性の解明

分担研究者　　加藤光広　　山形大学医学部小児科学講座

研究要旨：
シナプス小胞の膜結合に関与する *STXBP1* は大田原症候群の原因遺伝子である。大田原症候群 14 例，ウエスト症候群 20 例、その他の乳児期発症てんかん性脳症 10 例に対して *STXBP1* の変異解析を行い，病的変異を示した 7 例（大田原症候群５例、ウエスト症候群１例、分類不能の乳児期発症てんかん性脳症１例）の臨床型を解析した。全例経過中にスパズム発作をきたしたが、初期症状はさまざまであった。3 例は ACTH で、1 例は PB 大量療法で発作が消失したが、全例重度の発達遅滞を呈した。*STXBP1* 変異は大田原症候群の主要な原因であり、一部は大田原症候群を介さないウエスト症候群の原因となる。

Ａ．研究目的

年齢依存性てんかん性脳症は，てんかんに加え認知機能や運動障害などの発達障害を併発する疾患であり，発達期に応じた特徴的な発作型や脳波所見によって分類される複数のてんかん症候群で構成されている。新生児期に発症する大田原症候群と乳児期に発症するウエスト症候群は，年齢依存性てんかん性脳症の代表的疾患である。私たちは 2008 年に *STXBP1* が大田原症候群の原因遺伝子であることを明らかにしたが，その後の欧州からの報告では，*STXBP1* 変異は非特異的な乳幼児期発症のてんかん性脳症やウエスト症候群で同定され，大田原症候群では同定されないなど，*STXBP1* 変異の臨床像がまだ十分明らかになっていない。

本研究では，STXBP1 遺伝子変異による臨床型を明らかにする事を目的とした。

Ｂ．研究方法

保護者の承諾を得て，脳形成異常や代謝異常，周産期障害による明らかな原因を除外された年齢依存性てんかん性脳症の患者 44 例（大田原症候群 14 例，ウエスト症候群 20 例，その他の乳児期発症てんかん性脳症 10 例）および両親の血液から DNA を抽出し，さらに臨床情報（発作型・脳波・頭部 MRI・使用薬剤と効果・併発症など）を収集した。

STXBP1 遺伝子の全コード領域を high resolution melting (HRM)法を用いて変異スクリーニングを行い，陽性例に対して直接塩基配列の解析を行った。なお，男性では *ARX* 遺伝子を，女性では *CDKL5* 遺伝子の変異スクリーニングを行い，それぞれの変異例は除外した。

Ｃ．研究結果

大田原症候群５例、ウエスト症候群１例、分類不能の乳児期発症てんかん性脳症１例の計７例において *STXBP1* 変異を同定した。内訳はナンセンス変異３例，スプライシング異常２例，ミスセンス変異２例で，両親の検体が得られていない１例を除き全例新生変異であった。

７例の年齢は 2-13 か月（平均 6.4 か月）で、女児５例、男児２例であった。発症は生後１日から５か月（平均 1.6 か月）で、全例経過中にスパズム発作を呈したが、初期からスパズム発作をきたしたのは１例のみで、初発発作としては嘔吐や息止め、眼球上転など一定しなかった。大田原症候群の２例を除き５例がヒプスアリスミアを伴うウエスト症候群に変容し、平均 3.2 か月で移行していた。4 例(ACTH 3 例，高用量フェノバルビタール 1 例)は治療に反応し発作が一時的に消失したが，3 例は反応せず１日に数回発作がみられた。全例重度の発達遅滞を呈し、１例は体幹筋緊張の亢進が著明で後弓反張を呈した。乳児早期（1〜4 か月)に撮影された６例の MRI は正常であったが，9 か月に撮影された１例では脳萎縮と硬膜下血腫を認めた。

Ｄ．考察

今回始めてサプレッション・バーストを示さな

い２症例において *STXBP1* 変異を認め、他の報告同様 *STXBP1* が大田原症候群以外の表現型をきたすことが確認された。２例は発症が２か月、３か月と他に比べて遅いが、ヒプスアリスミアを伴うスパズム発作を呈し、ACTH が発作消失に有効であった。大田原症候群における変異頻度は 36%と既報告通り高率だが、ウエスト症候群では前回スクリーニングした 54 例と合わせると 1.4%であり、大田原症候群に比較してまれであった。遺伝型による表現型の差はなく、ハプロ不全を示唆する。

ACTH 以外に１例でフェノバルビタールの大量療法が有効性を示した。大田原症候群におけるフェノバルビタール大量療法の有効性は経験的に知られていたが、今後基礎原因との関連性を明らかにする必要がある。

Ｅ．結論

STXBP1 変異は大田原症候群の主要な原因であり、一部は大田原症候群を介さないウエスト症候群の原因となる。

Ｆ．健康危険情報

特になし。

Ｇ．研究発表

１．論文発表

1) Saitsu H, Igarashi N, Kato M, Okada I, Kosho T, Shimokawa O, Sasaki Y, Nishiyama K, Tsurusaki Y, Doi H, Miyake N, Harada N, Hayasaka K, Matasumoto N. De novo 5q14.3 translocation 121.5-kb upstream of MEF2C in a patient with severe intellectual disability and early-onset epileptic encephalopathy. Am J Med Genet A 155:2879-2884, 2011
2) Tohyama J, Kato M, Kawasaki S, Harada N, Kawara H, Matsui T, Akasaka N, Ohashi T, Kobayashi Y, Matsumoto N. Dandy-Walker malformation associated with heterozygous ZIC1 and ZIC4 deletion: Report of a new patient. Am J Med Genet A 155A:130-133, 2011
3) Kato M. Going BAC or oligo microarray to the well: a commentary on Clinical application of array-based comparative genomic hybridization by two-stage screening for 536 patients with mental retardation and multiple congenital anomalies. J Hum Genet 56:104-105, 2011

学会発表

1) Mitsuhiro Kato, Renzo Guerrini: EOEE with ARX abnormalities. Genetically determined early onset epileptic encephalopathies (EOEE): from phenotype to diagnostic algorithms, August 2011, Florence, Italy
2) Mitsuhiro Kato, Ingrid E. Scheffer: EOEE with STXBP1 abnormalities. Genetically determined early onset epileptic encephalopathies (EOEE): from phenotype to diagnostic algorithms, August 2011, Florence, Italy
3) Mitsuhiro Kato: Analysis of a cohort of Japanese patients with EOEE and overview of treatment issues. Genetically determined early onset epileptic encephalopathies (EOEE): from phenotype to diagnostic algorithms, August 2011, Florence, Italy
4) Jun Tohyama, Hirotomo Saitsu, Keiko Shimojima, Noriyuki Akasaka, Tsukasa Ohashi, Yu Kobayashi, Toshiyuki Yamamoto, Naomichi Matsumoto, Mitsuhiro Kato: Involvement of chromosomal aberrations in patients with early epileptic encephalopathy. 29th International Epilepsy Congress, August–September 2011, Rome, Italy

Ｈ．知的財産権の出願・登録状況

なし

平成２３年度厚生科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）
分担研究報告書

超細密染色体分析から捉え直すヒト発達障害研究

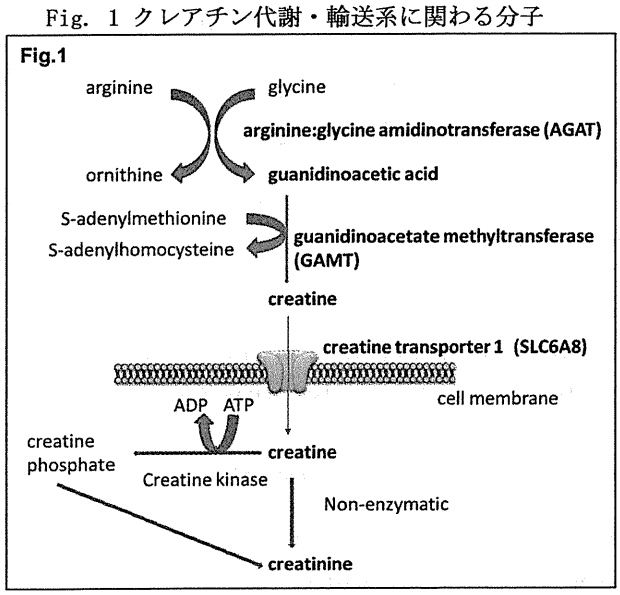
分担研究課題：本邦におけるクレアチン欠損症のスクリーニング法確立に向けて
分担研究者　　小坂仁　　神奈川県立こども医療センター神経内科
研究協力者　　和田敬仁　　神奈川県立こども医療センター神経内科

研究要旨：クレアチン欠損症は L-arginine: glycine amidinotransferase 欠損症, guanidinoacetate methyltransferase 欠損症, creatine transporter 欠損症よりなる。欧米では精神遅滞の 2%前後を占めるとも言われるが、本邦での報告例はなく、その頻度も不明である。クレアチン欠損症の診断法としては、高速クロマトグラフィーと質量分析計を用いた測定法が用いられ、一般的な普及となっていない。我々は、HPLC を用いた簡便なスクリーニング法を開発し、この方法を用い当院の発達遅滞患者にスクリーニングを行い、本邦初症例となる２家系を見出した。

A．研究目的

クレアチン(CR)は、生体内において ATP の速やかな産生に重要な役割を持つことが、近年明らかになりつつある。特に脳において CR は、血液脳関門を通過しないために、独自の合成、輸送経路を持つことが知られる。これらの異常により、脳性クレアチン欠損症；Cerebral creatine deficiency syndromes, CCDS を呈する。現在までに(L-arginine: glycine amidinotransferase (AGAT)欠損症, guanidinoacetate methyltransferase (GAMT) 欠損症, creatine transporter (SLC6A8) が知られる(Fig. 1)。

Fig. 1 クレアチン代謝・輸送系に関わる分子



これら 3 疾患の共通の症状は精神遅滞、自閉症、てんかんであり、欧米では精神遅滞の 2%前後を占めるといわれるが、本邦では報告例がなく、その頻度は不明である。

この疾患のスクリーニング方法としては、高速クロマトグラフィーと質量分析を組み合わせた方法が診断の主流であるが、使用できる施設が限られており、昨年 HPLC を用いた簡便なスクリーニング方法を開発し報告した。今年度は、この方法を用いて、本邦でのスクリーニングの初年度の結果を報告する。

B．研究方法

対象は、当院通院中の原因不明の精神運動発達遅滞児(1-15 才)であり、原則としてアミノ酸代謝異常、染色体検査、甲状腺機能、乳酸・ピルビン酸異常を除外された症例である。凍結尿 500 µl を等量のアセトニトリル添加後、遠心分離し、25 µl を用い、CR：クレアチン、 GAA：グアニジノ酢酸、GN：クレアチニンを測定し、年齢平均の 2SD の高値あるいは低値をもって一次スクリーニング陽性とした。(参照、Table 1; AGAT 欠損症; GAA/CN↓CR/CN↓、GAMT 欠損症;GAA/CN↑ CR/CN↓、SLC6A8 欠損症；GAA/CN 正常、CR/CN↑)。このスクリーニングにより、異常が疑われた患者については、同意を所得後、患者血液から DNA を採取し、それぞれ原因遺伝子である *AGAT, GAMT, SLC6A8* 遺伝子を PCR ダイレクトシークエンスにより塩基配列を決定した。

Table 1. Urine Creatine and Guanidinoacetic acid Levels in Patients with Defects of Creatine Synthesis and Transport

Disease	GA/CN	CR/CN
AGAT deficiency	Low	Low
GAMT deficiency	High	Normal
CR transporter deficiency	Normal	High (4017.5±286.4)

( ); values from one patient with CR transporter deficiency (μmol/mmol); HPLC method; 4017.5±286.4; mean ±SD, n=2)
Normal values with this study from 15 samples are 798.6±574.8(CR/CN(μmol/mmol)(HPLC method; mean ±SD)

Abbrebiations;arginine: glycine amidinotransferase, AGAT; guanidinoacetate methyltransferase, GAMT; creatine, CR; Guanidinoacetic acid, GA; Creatinine, CN;

Table 1. 尿代謝物によるクレアチン代謝異常スクリーニング

C．研究結果

①当院の精神遅滞症例98名のスクリーニングを行いAGAT；1名，GAMT；2名，SLC6A8；5名の対象者が、スクリーニング陽性とされた。

②これらの8名で、塩基配列を決定したところ、2名でSLC6A8異常（1例は全欠失）を確認した。いずれの患者も磁気共鳴分光法で大脳におけるCRピークの消失が消失していた。

D．考察

本邦初症例となるSLC6A8異常症2例を見いだした。いままで日本でCCDSの報告がないのは、この疾患の存在自体が知られていないことや、測定が難しい事などに起因する可能性がある。

E．結論

本邦でもCCDS欠損、特にSLC6A8欠損症例が存在することがわかった、女児においては大量のクレアチンが臨床症状を改善することが知られており、治療可能な発達遅滞として今後本邦でのスクリーニング体制を確立する必要がある。

G．研究発表

1．論文発表

Arai M, Osaka H (2011) Acute leukoencephalopathy possibly induced by phenytoin intoxication in an adult patient with methylenetetrahydrofolate reductase deficiency. Epilepsia 52 (7):58-61.

Tsuji M, Mazaki E, Ogiwara I, Wada T, Iai M, Okumura A, Yamashita S, Yamakawa K, Osaka H (2011) Acute encephalopathy in a patient with Dravet syndrome. Neuropediatrics 42 (2):78-81.

Tsuji M, Takagi A, Sameshima K, Iai M, Yamashita S, Shinbo H, Furuya N, Kurosawa K, Osaka H (2011) 5,10-Methylenetetrahydrofolate reductase deficiency with progressive polyneuropathy in an infant. Brain Dev 33 (6):521-524.

Tsurusaki Y, Osaka H, Hamanoue H, Shimbo H, Tsuji M, Doi H, Saitsu H, Matsumoto N, Miyake N (2011) Rapid detection of a mutation causing X-linked leucoencephalopathy by exome sequencing. J Med Genet 48 (9):606-609.

Tsuyusaki Y, Shimbo H, Wada T, Iai M, Tsuji M, Yamashita S, Aida N, Kure S, Osaka H (2011) Paradoxical increase in seizure frequency with valproate in nonketotic hyperglycinemia. Brain Dev. 10.1016/j.braindev.2011.01.005

Saitsu H, Osaka H, Sasaki M, Takanashi J, Hamada K, Yamashita A, Shibayama H, Shiina M, Kondo Y, Nishiyama K, Tsurusaki Y, Miyake N, Doi H, Ogata K, Inoue K, Matsumoto N (2011) Mutations in POLR3A and POLR3B Encoding RNA Polymerase III Subunits Cause an Autosomal-Recessive Hypomyelinating Leukoencephalopathy. Am J Hum Genet 89 (5):644-651.

Saitsu H, Osaka H, Nishiyama K, Tsurusaki Y, Doi H, Miyake N, Matsumoto N (2011) A girl with early-onset epileptic encephalopathy associated with microdeletion involving CDKL5. Brain Dev. doi:S0387-7604(11)00182-3

Tanoue K, Matsui K, Ohshiro A, Yamamoto A, Hayashi T, Fujimoto J, Osaka H (2011) Acute encephalopathy in two cases with severe congenital hydrocephalus. Brain Dev 33 (7):616-619.

Wada T, Shimbo H, Osaka H (2011) A simple screening method using ion chromatography for the diagnosis of cerebral creatine deficiency syndromes. Amino Acids. doi:10.1007/s00726-011-1146-1

Saitsu H, Osaka H, Sugiyama S, Kurosawa K, Mizuguchi T, Nishiyama K, NishimuraA, Tsurusaki Y, Doi H, Miyake N, Harada N, Kato M, Matsumoto N. (2011) Early infantile epileptic

encephalopathy associated with the disrupted gene encoding Slit-Robo Rho GTPase activating protein 2 (SRGAP2). Am J Med Genet A. 2011 Nov 21. doi:10.1002/ajmg.a.34363.

Yoneda Y, Haginoya K, Arai H, Yamaoka S, Tsurusaki Y, Doi H, Miyake N, Yokochi K, Osaka H, Kato M, Matsumoto N, and Saitsu H. De novo and inherited mutations in COL4A2, encoding the type IV collagen α2 chain cause porencephaly. Am J Hum Genet. (in press)

B．学会発表

渡辺好宏、辻　恵、和田敬仁、井合瑞江、山下純正、小坂仁、当院で経験した小児期発症歯状核赤核淡蒼球ルイ体萎縮症のてんかん症状について、第67回神奈川てんかん懇話会 2011.1.29 横浜

谷河純平、新保裕子、渡辺好宏、辻恵、和田敬仁、井合瑞江、山下純正、小坂仁, 特徴的な顔貌異常を呈するLeigh脳症(SURF1遺伝子異常)の1女児例, 第47回神奈川小児神経学会、2011.1.22 横浜

大城亜希子、田上幸治、松井潔、山本敦子、林拓也、藤本潤一、小坂仁、VPシャント術後の先天性水頭症の患児に発症した急性脳症2症例、第47回神奈川小児神経懇話会、2011.1.22 横浜（座長）
Hitoshi Osaka, Atsuo Nezu, Hirotomo Saitsu, Kenji Kurosawa, Hiroko Shimbo, Naomichi Matsumoto, Ken Inoue, A SOX10 binding site mutation in GJC2 promoter causes Pelizaeus-Merzbacher-like disease 2011年5月26日(土)第53回日本小児神経学会総会、English session 横浜.

安西里恵、小坂仁、露崎悠、高木篤史、辻　恵、鮫島希代子、井合瑞江、山下純正、五味淳、田中水緒、田中祐吉、平田善弘、北河徳彦遺伝子診断で確定した神経型Wilson病の1例　2011年5月26日（土）第53回日本小児神経学会総会、横浜

辻　恵、渡辺好宏、和田敬仁、井合瑞江、山下純正、小坂　仁 診断に苦慮した先天性白質形成不全Allan-Herndon-Dudley症候群の兄弟例 2011年5月26日（土）第53回日本小児神経学会総会、横浜

小坂 仁. 診断のための検査と医療的ケア（教育講演）先天性大脳白質形成不全症の克服へ向けて～患者さんを取巻く医療と研究の進歩～　第2回市民公開セミナー主催：厚生労働科学研究補助金難治性疾患克服研究事業「先天性大脳白質形成不全症の診断と治療に向けた研究」班　　平成22年7月17日, 横浜

小坂 仁、才津浩智、奥田美津子、高野亨子、和田敬仁、井合瑞江、山下純正、松本直通, DKL5欠損を認めた早期てんかん性脳症の1女児例, 第68回神奈川てんかん懇話会平成23年7月30日, 横浜

小坂　仁、辻恵、井合瑞江、山下純正、荒井元美
5,10-Methylenetetr ahydrofolate reductase deficiencyの2例、第45回日本てんかん学会2011年10月6日、7日新潟

奥田美津子、高野亨子、和田敬仁、井合瑞江、山下純正、小坂仁、高橋幸利　Opsoclonus-myoclonus syndromeに対し、Rituximabを使用した1例第47回神奈川小児神経懇話会、23年6月17日、横浜

H. 知的所有権の取得状況；なし

研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書　籍　名	出版社名	出版地	出版年	ページ

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Saitsu H, et al., Matsumoto N.	Paternal mosaicism of a *STXBP1* mutation in Ohtahara syndrome.	Clin Genet	80 (5)	484-488	2011
Okada I, et al., Matsumoto N, et al.	*SMOC1* is essential for ocular and limb development in humans and mice.	Am J Hum Genet	88(1)	30-41	2011
Hiraki Y, et al., Matsumoto N.	A de novo deletion of 20q11.2-q12 in a boy presenting with abnormal hands and feet, retinal dysplasia, and intractable feeding difficulty.	Am J Med Genet Part A	152(2)	409-414	2011
Tonoki H, et al., Matsumoto N, Iizuka S.	Axenfeld-Rieger anomaly and Axenfeld-Rieger syndrome: clinical, molecular-cytogenetic, and DNA array analyses on three patients with chromosomal defects at 6p25.	Am J Med Genet Part A	155 (12)	2925-2932	2011
Tsurusaki Y, et al., Matsumoto N, Miyake N.	Rapid detection of a mutation causing X-linked leukodystrophy by exome sequencing.	J Med Genet	48 (9)	606-609	2011
Saitsu H, Matsumoto N.	Genetic commentary: *De novo* mutations in epilepsy.	Dev Med Child Neurol	53 (9)	806-807	2011
Tsurusaki Y, et al., Matsumoto N.	Exome sequencing of two patients in a family with atypical X-linked leukodystrophy.	Clin Genet	80 (2)	161-166	2011

Yano S, et al., Matsumoto N, et al.	Familial Simpson-Golabi-Behmel syndrome: Studies of X-chromosome inactivation and clinical phenotypes in two female individuals with *GPC3* mutations..	Clin Genet	80(5)	466-471	2011
Miyake N, et al., Matsumoto N.	A novel homozygous mutation of *DARS2* may cause a severe LBSL variant.	Clin Genet	80(3)	293-296	2011
Saitsu H, et al., Matsumoto N.	Early infantile epileptic encephalopathy associated with the disrupted gene encoding Slit-Robo Rho GTPase activating protein 2 (*SRGAP2*).	Am J Med Genet	158A (1)	199-205	2011
Hannibal MC, et al., Matsumoto N, et al.	Spectrum of MLL2 (ALR) mutations in 110 cases of Kabuki syndrome.	Am J Med Genet	155A (7)	1511-1516	2011
Saitsu H, et al., Matsumoto N.	Mutations in *POLR3A* and *POLR3B* encoding RNA polymerase III subunits cause an autosomal recessive hypomyelinating leukoencephalopathy.	Am J Hum Genet	89(11)	644-651	2011d
Okamoto et al.	Submicroscopic deletion in 7q31 encompassing CADPS2 and TSPAN12 in a child with autism spectrum disorder and PHPV	Am J Med Genet Part A	155	1568-1573	2011
Filges I, et al., Okamoto N, et al.	Reduced expression by SETBP1 haploinsufficiency causes developmental and expressive language delay indicating a phenotype distinct from Schinzel-Giedion syndrome.	J Med Genet.	48	117-122	2011
Yasuda Y, Hashimoto R, et al.	Gene expression analysis in lymphoblasts derived from patients with autism spectrum disorder.	Molecular Autism	2(1):9		2011

CLINICAL GENETICS An International Journal of Genetics, Molecular and Personalized Medicine

Clin Genet 2011: 80: 484–488
Printed in Singapore. All rights reserved

CLINICAL GENETICS
doi: 10.1111/j.1399-0004.2010.01575.x

Short Report

Paternal mosaicism of an *STXBP1* mutation in OS

Saitsu H, Hoshino H, Kato M, Nishiyama K, Okada I, Yoneda Y, Tsurusaki Y, Doi H, Miyake N, Kubota M, Hayasaka K, Matsumoto N. Paternal mosaicism of an *STXBP1* mutation in OS. Clin Genet 2011: 80: 484–488. © John Wiley & Sons A/S, 2010

Ohtahara syndrome (OS) is one of the most severe and earliest forms of epilepsy. We have recently identified that the *de novo* mutations of *STXBP1* are important causes for OS. Here we report a paternal somatic mosaicism of an *STXBP1* mutation. The affected daughter had onset of spasms at 1 month of age, and interictal electroencephalogram showed suppression-burst pattern, leading to the diagnosis of OS. She had a heterozygous c.902+5G>A mutation of *STXBP1*, which affects donor splicing of exon 10, resulting in 138-bp insertion of intron 10 sequences in the transcript. The mutant transcript had a premature stop codon, and was degraded by nonsense-mediated mRNA decay in lymphoblastoid cells derived from the patient. High-resolution melting analysis of clinically unaffected parental DNAs suggested that the father was somatic mosaic for the mutation, which was also suggested by sequencing. Cloning of PCR products amplified with the paternal DNA samples extracted from blood, saliva, buccal cells, and nails suggested that 5.3%, 8.7%, 11.9%, and 16.9% of alleles harbored the mutation, respectively. This is a first report of somatic mosaicism of an *STXBP1* mutation, which has implications in genetic counseling of OS.

Conflict of interest

None of the authors has any conflict of interest to disclose.

H Saitsu[a], H Hoshino[b], M Kato[c], K Nishiyama[a], I Okada[a], Y Yoneda[a], Y Tsurusaki[a], H Doi[a], N Miyake[a], M Kubota[b], K Hayasaka[c] and N Matsumoto[a]

[a]Department of Human Genetics, Yokohama City University Graduate School of Medicine, Fukuura 3-9, Kanazawa-ku, Yokohama 236-0004, Japan, [b]Division of Neurology, National Center for Child Health and Development, Okura 2-10-1, Setagaya-ku, Tokyo 157-8535, Japan, and [c]Department of Pediatrics, Yamagata University Faculty of Medicine, Iida-nishi 2-2-2, Yamagata 990-9585, Japan

Key words: HRM analysis – OS – somatic mosaicism – *STXBP1*

Corresponding author: Dr Hirotomo Saitsu, Department of Human Genetics, Yokohama City University Graduate School of Medicine, 3-9 Fukuura, Kanazawa-ku, Yokohama 236-0004, Japan.
Tel.: +81-45-787-2606;
fax: +81-45-786-5219;
e-mail: hsaitsu@yokohama-cu.ac.jp

Received 8 August 2010, revised and accepted for publication 30 September 2010

Ohtahara syndrome (OS), also known as early infantile epileptic encephalopathy with suppression-burst, is one of the most severe and earliest forms of epilepsy (1). It is characterized by early onset of seizures, typically frequent epileptic spasms, seizure intractability, characteristic suppression-burst patterns on electroencephalogram (EEG), and poor outcome with severe psychomotor retardation (2, 3). Brain malformations such as cerebral dysgenesis or hemimegalencephaly are often associated with OS, but cryptogenic or idiopathic OS is found in a subset of OS patients, in whom genetic aberrations might be involved (4). Mutations in *ARX* gene have been found in several male patients with OS (5–8). We have recently found *de novo* mutations in *STXBP1* (encoding syntaxin binding protein 1, also known as MUNC18-1) in individuals with cryptogenic OS (9). A microdeletion involving *STXBP1* and various kinds of point mutations including missense, frameshift, nonsense, and splicing mutations have been found in about one-third of Japanese cases with cryptogenic OS (10). We have showed that both missense mutations and

a splicing mutation result in haploinsufficiency of *STXBP1*: degradation of STXBP1 proteins with missense mutations and nonsense-mediated mRNA decay (NMD) associated with an aberrantly spliced mRNAs (10).

Here we describe a family with an affected daughter with an *STXBP1* mutation and healthy parents. Parental analysis indicates that the father is somatic mosaic for the mutation. Detailed molecular analysis is presented.

Materials and methods

Patient and her parents

The 1-year-old girl is a product of unrelated healthy parents. There is no history of epilepsy in her parents. She was born at term without asphyxia after an uneventful pregnancy. Her physical and neurological findings were normal until vomitting, which was supposed to be a presymptomatic event of seizures, was observed at 25 days of age, and her seizures started at 37 days of age, consisting of brief tonic spasms, occasionally in cluster, followed by vomiting and subtle seizures, such as head extension, upward eye gazing, and vocalization, with increased muscle tone of her extremities for a few seconds. According to suppression-burst pattern on EEG (Fig. 1a,b), she was diagnosed as OS. Brain magnetic resonance imaging (MRI) showed normal brain structure (Fig. 1c–f). Seizures were refractory to antiepileptic drugs, such as high-dose phenobarbital, phenytoin, zonisamide, pyridoxal phosphate, valproic acid, ketogenic diet, and potassium bromide. Injection of adrenocorticotropic hormone (ACTH) was partially effective. She was hypertonic and could not control her head or smile. At 6 months of age, a mild rigospastic quadriplegia was noted. Developmental milestones were profoundly delayed.

DNA samples

Peripheral blood leukocytes from the patient and her parents as well as other tissues from the father were used for this study. Genomic DNA from whole blood, saliva, buccal cells, and nails were isolated using a Wizard Genomic DNA Purification Kit (Promega, Tokyo, Japan), an Oragene DNA kit (DNA Genotek, Ottawa, Canada), an ISOHAIR kit (Nippon Gene, Toyama, Japan), and a Gentra Puregene Buccal Cell Kit (Gentra, Minneapolis, MN), respectively. Experimental protocols were approved by Institutional Review Boards for Ethical Issues at Yokohama City University School of Medicine and Yamagata University Faculty of Medicine. Informed consent was obtained from the patient's parents in agreement with the requirements of Japanese regulations.

Mutation analysis and TA cloning

Mutation screening of *STXBP1* by high-resolution melting (HRM) analysis using RotorGene-6200 HRM (Corbett Life Science, Brisbane, Australia) was performed as previously described (10). Parentage was confirmed by microsatellite analysis (9). For measurement of the ratio of wild-type and mutant alleles, PCR products using paternal DNA as a template were subcloned into pCR4-TOPO vector (Invitrogen, Carlsbad, CA). Cloned fragments were amplified with PCR mixture containing 1 × ExTaq buffer, 0.2 mM each dNTP, 0.5 μM each primer, and 0.375 U Ex TaqHS polymerase (Takara Bio, Ohtsu, Japan). M13 forward (5′-TAAAACGACGGCCAGTGAAT-3′) and M13 reverse (5′-CAGGAAACAGCTATGACCAT GA-3′) primers were used for amplification, and an ex10-F (5′-AGCTGAAGAGGGTTCGAT GA-3′) primer was used for sequencing.

RNA analysis

RNA analysis using lymphoblastoid cells (LCL) was performed essentially as previously described (10). Briefly, after incubation with dimethyl sulfoxide (as vehicle control) or 30 μM cycloheximide (Sigma, Tokyo, Japan) for 4 h, total RNA was extracted using RNeasy Plus Mini Kit (Qiagen, Tokyo, Japan). Two micrograms total RNA was subjected to reverse transcription, and 1 μl cDNA was used for PCR. Primer sequences are ex9-F (5′-CCCTGTGCTCCATGAATTGAC TTT-3′) and ex12-R (5′-CTGAGGCATCTTCTTC AGCATCTGG-3′). Inhibition of NMD was estimated according to the density ratios of lower normal and upper aberrant bands with/without 30-μM cycloheximide treatments in the culture of the patient's LCL. Two separately extracted RNA samples were used for duplicated experiments, respectively. Data were averaged and the standard deviation was calculated. Statistical analyses were performed using the unpaired Student's *t*-test (two-tailed). DNA of each PCR band purified by QIAEXII Gel extraction kit (Qiagen, Tokyo, Japan) was sequenced.

Results

Through the screening for *STXBP1* mutations in individuals with cryptogenic OS, we found a patient harboring heterozygous c.902+5G>A mutation. To examine whether the mutation

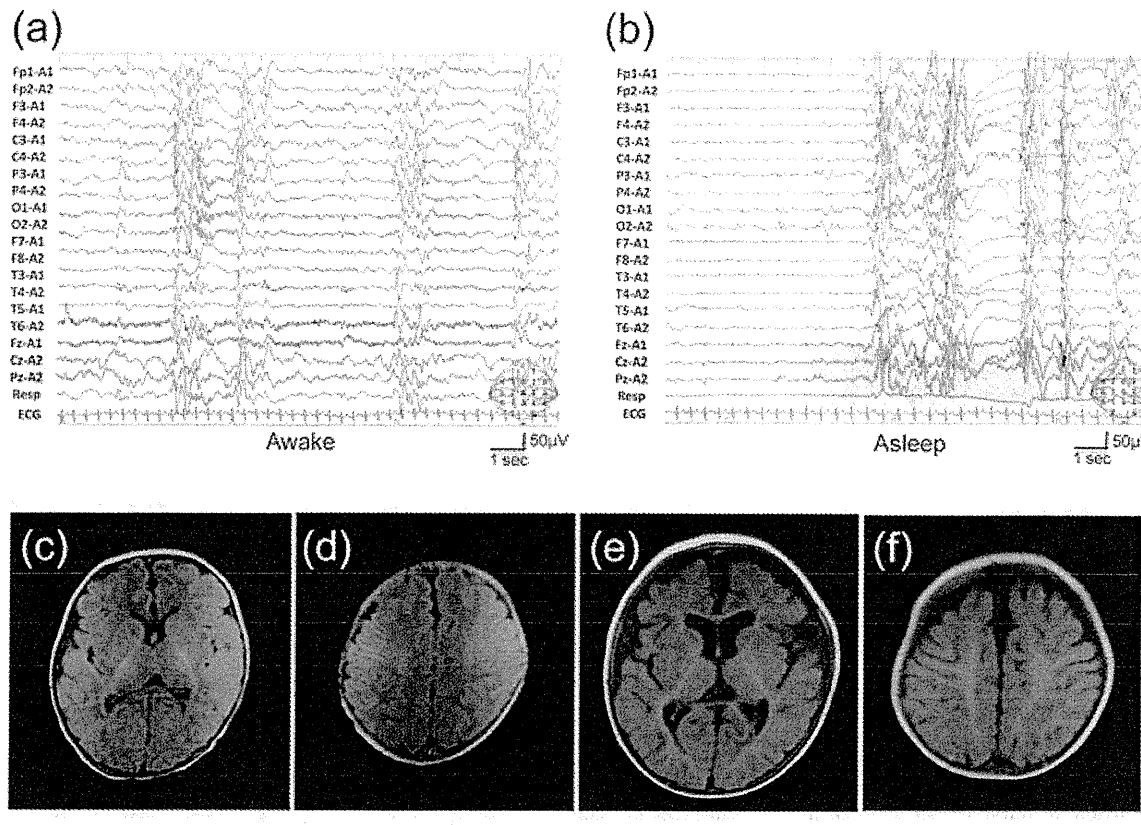


Fig. 1. Interictal electroencephalogram (EEG) (**a**, **b**) and brain magnetic resonance imaging (MRI) (**c**–**f**) of the patient. EEG during both waking (**a**) and sleep (**b**) at 1 month of age showed suppression-burst pattern consisting of low-voltage, almost flat phase and high-voltage paroxysmal activity phase. Brain MRI showed normal findings at 1 month of age (**c**, **d**), and slightly dilated lateral ventricles at 11 months of age (**e**, **f**) because of adrenocorticotropic hormone injection.

could affect donor splicing of exon 10, reverse transcriptase (RT)–PCR designed to amplify exons 9–12 was performed using total RNA extracted from LCL derived from the patient (Fig. 2a). A single band (286 bp), corresponding to the wild-type *STXBP1* allele, was amplified using a cDNA template from a control LCL (Fig. 2b). By contrast, a longer band was detected from the patient's cDNA (Fig. 2b). The longer mutant transcript had a 138-bp insertion of intron 10 sequences (Fig. 2c), producing a premature stop codon at amino acid position 302; therefore, the mutant mRNAs are probably to be degraded by NMD (11, 12). The intensity ratio of the mutant compared to the normal band was increased up to 36.3% after treatment with 30 μM cycloheximide, which inhibits NMD, compared to 13.8% in the untreated condition (Fig. 2d). Thus the mutant transcript suffered from degradation by NMD, which would result in haploinsufficiency of *STXBP1*.

To examine whether the c.902+5G>A mutation occurred *de novo*, the parental DNA extracted from whole blood were analyzed by HRM. Compared with the mother's sample, the patient's sample showed clearly shifted melting curve, indicating that the heterozygous c.902+5G>A mutation could be surely detected (Fig. 3a). Interestingly, the father's sample showed a slightly shifted melting curve, suggesting that the father may harbor the mutation in mosaic state, which was suggested by sequencing (Fig. 3a,b). Similar melting curves and electropherograms were obtained in DNA extracted from saliva, buccal cells, and nails (Fig. 3a,b). We further investigated the mosaicism by counting wild-type G and mutant A alleles after TA cloning of the PCR product. DNA extracted from blood, saliva, buccal cells, and nails suggested that 5.3%, 8.7%, 11.9%, and 16.9% of alleles (i.e. 10.6%, 17.4%, 23.8%, and 33.8% of cells) harbored the mutation, respectively (Fig. 3c).

Discussion

To date, 13 point mutations and one deletion of *STXBP1* have been reported in individuals with OS (9, 10). Thirteen out of fourteen deletion/mutations were confirmed as *de novo*

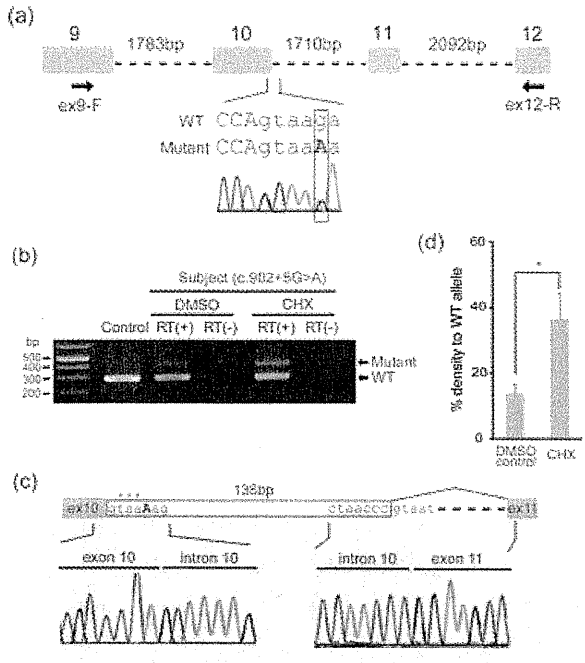


Fig. 2. The c.902+5G>A mutation causing abnormal splicing associated with nonsense-mediated mRNA decay (NMD). **(a)** Schematic representation of the genomic structure from exons 9 to 12 of *STXBP1*. Exons, introns and primers are shown by gray boxes, dashed lines and arrows, respectively. The mutation in intron 10 was colored in red. Sequences of exon and intron are presented in upper and lower cases, respectively. **(b)** Reverse transcriptase (RT) – PCR analysis of the patient with c.902+5G>A and a normal control. Two PCR products were detected from the patient's cDNA: lower was the wild-type (WT) transcript and upper was the mutant. Only a single WT amplicon was detected in a control. The mutant amplicon was significantly increased by 30-μM cycloheximide (CHX) treatment compared to DMSO treatment as a vehicle control. RT (+): with reverse transcriptase, RT (−): without reverse transcriptase as a negative control. **(c)** Sequence of mutant amplicons clearly showed a 138-bp insertion of intron 10 sequences and a premature stop codon (asterisk) in the mutant transcript. **(d)** Quantitative analysis of the NMD inhibition by CHX based on the data shown in **(b)**. *p = 0.00186 by unpaired Student's *t*-test (two-tailed). Averages of duplicated experiments using two distinctive RNA samples, respectively, are shown with error bars (standard deviation).

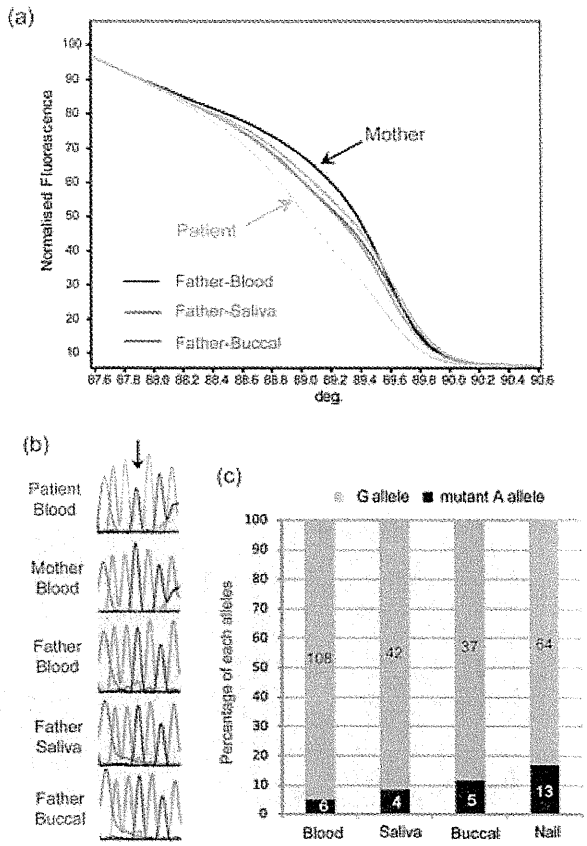


Fig. 3. Paternal somatic mosaicism of the c.902+5G>A mutation. **(a)** Melting curves of PCR products. Compared with the mother's sample (black), the patient's sample (gray) showed largely shifted melting curve. The father's sample from blood (red), saliva (green), and buccal cells (blue) showed slightly, but distinctly shifted melting curves. **(b)** Electropherograms of the c.902+5G>A mutation (arrow) showed mosaicism of the mutation in the father. **(c)** Allele frequencies counted by TA cloning of PCR products and sequencing. DNA extracted from blood, saliva, buccal cells, and nails of the father showed that 5.3%, 8.7%, 11.9%, and 16.9% of alleles harbored the mutant A allele. The numbers of colonies corresponding to each allele are indicated within bars.

events (paternal DNA was unavailable for one remaining mutation). Many OSs are sporadic, probably because of their poor outcome with severe psychomotor retardation; however, some X-linked familial cases have been reported with *ARX* mutations (6, 8). Here we have showed a paternal somatic mosaicism of an *STXBP1* mutation. Although DNA from the semen of the father could not be analyzed in this study, the identical c.902+5G>A mutation found in both the father and the affected daughter indicated that the father should possess the mutation in germ cells as a mosaic state, suggesting recurrence risks. Thus, somatic and germline mosaicism of *STXBP1* mutations should be carefully taken into account especially for genetic counseling of familial OS cases.

We have successfully identified the paternal somatic mosaicism of an *STXBP1* mutation by HRM. DNA from blood indicated that the mosaic ratio is as low as about 5%; therefore, HRM could be very sensitive in detecting low-ratio mosaicism. HRM is a rapid and simple approach to detect heteroduplexes (13). It only requires the addition of a saturating dye before PCR. By HRM analysis of the PCR products, the sensitivity of successful detection of heterozygotes is nearly 100% (13). It should be noted that the sensitivity of HRM to

detect somatic changes or heteroplasmy is much better than that of DNA sequencing (14, 15): HRM could detect the level of somatic mosaicism down to 5–10% (15). However, the ability to detect low percentage heterodeuplex of PCR products may vary among mutations. Although the heterozygous c.902+5G>A mutation showed largely shifted melting curve, we experienced some heterozygous mutations only showing slightly shifted melting curve, in which we may not be able to detect the mosaicism. Therefore, optimization of HRM analysis for each mutation would be recommended especially to examine parental samples.

In conclusion, we firstly described the paternal somatic mosaicism of an *STXBP1* mutation. The percentage of mosaicism was quite low (5–17%), and no minor problems like dexterity, intelligence (cognition), behavior or psychological state were recognized in the father. The information described here was quite useful for future genetic counseling of this family.

Acknowledgements

We would like to thank the patient and her family for their participation in this study. This work was supported by Research Grants from the Ministry of Health, Labour and Welfare (N. M. and M. K.), Grant-in-Aid for Scientific Research from Japan Society for the Promotion of Science (N. M. and M. K.), Grant-in-Aid for Young Scientist from Japan Society for the Promotion of Science (H. S.), Research Promotion Fund from Yokohama Foundation for Advancement of Medical Science (H. S.), Research Grants from the Japan Epilepsy Research Foundation (H. S. and M. K.), and Research Grant from Naito Foundation (N. M.).

References

1. Ohtahara S, Ishida T, Oka E et al. On the specific age dependent epileptic syndrome: the early-infantile epileptic encephalopathy with suppression-burst. No to Hattatsu 1976: 8: 270–279.
2. Djukic A, Lado FA, Shinnar S et al. Are early myoclonic encephalopathy (EME) and the Ohtahara syndrome (EIEE) independent of each other?. Epilepsy Res 2006: 70 (Suppl. 1): S68–S76.
3. Ohtahara S, Yamatogi Y. Ohtahara syndrome: with special reference to its developmental aspects for differentiating from early myoclonic encephalopathy. Epilepsy Res 2006: 70 (Suppl. 1): S58–S67.
4. Yamatogi Y, Ohtahara S. Early-infantile epileptic encephalopathy with suppression-bursts, Ohtahara syndrome; its overview referring to our 16 cases. Brain Dev 2002: 24: 13–23.
5. Kato M, Saitoh S, Kamei A et al. A Llonger Ppolyalanine Eexpansion Mmutation in the ARX Ggene Ccauses Eearly Iinfantile Eepileptic Eencephalopathy with Ssuppression-Bburst Ppattern (Ohtahara Ssyndrome). Am J Hum Genet 2007: 81: 361–366.
6. Fullston T, Brueton L, Willis T et al. Ohtahara syndrome in a family with an ARX protein truncation mutation (c.81C>G/p.Y27X). Eur J Hum Genet 2010: 18: 157–162.
7. Absoud M, Parr JR, Halliday D et al. A novel ARX phenotype: rapid neurodegeneration with Ohtahara syndrome and a dyskinetic movement disorder. Dev Med Child Neurol 2009: 52: 305–307.
8. Kato M, Koyama N, Ohta M et al. Frameshift mutations of the ARX gene in familial Ohtahara syndrome. Epilepsia 2010: 51: 1679–1684.
9. Saitsu H, Kato M, Mizuguchi T et al. *De novo* mutations in the gene encoding STXBP1 (MUNC18-1) cause early infantile epileptic encephalopathy. Nat Genet 2008: 40: 782–788.
10. Saitsu H, Kato M, Okada I et al. STXBP1 mutations in early infantile epileptic encephalopathy with suppression-burst pattern. Epilepsia, doi: 10.1111/j.1528-1167.2010.02728.x.
11. Shyu AB, Wilkinson MF, van Hoof A. Messenger RNA regulation: to translate or to degrade. EMBO J 2008: 27: 471–481.
12. Maquat LE, Kinniburgh AJ, Rachmilewitz EA et al. Unstable beta-globin mRNA in mRNA-deficient beta o thalassemia. Cell 1981: 27: 543–553.
13. Wittwer CT. High-resolution DNA melting analysis: advancements and limitations. Hum Mutat 2009: 30: 857–859.
14. Dobrowolski SF, Hendrickx AT, van den Bosch BJ et al. Identifying sequence variants in the human mitochondrial genome using high-resolution melt (HRM) profiling. Hum Mutat 2009: 30: 891–898.
15. Vossen RH, Aten E, Roos A et al. High-resolution melting analysis (HRMA): more than just sequence variant screening. Hum Mutat 2009: 30: 860–866.

ARTICLE

SMOC1 Is Essential for Ocular and Limb Development in Humans and Mice

Ippei Okada,[1,14] Haruka Hamanoue,[1,2,14] Koji Terada,[3] Takaya Tohma,[4] Andre Megarbane,[5] Eliane Chouery,[5] Joelle Abou-Ghoch,[5] Nadine Jalkh,[5] Ozgur Cogulu,[6] Ferda Ozkinay,[6] Kyoji Horie,[7] Junji Takeda,[7,8] Tatsuya Furuichi,[9,10] Shiro Ikegawa,[9] Kiyomi Nishiyama,[1] Satoko Miyatake,[1] Akira Nishimura,[1] Takeshi Mizuguchi,[1,15] Norio Niikawa,[11,12] Fumiki Hirahara,[2] Tadashi Kaname,[13] Koh-ichiro Yoshiura,[12] Yoshinori Tsurusaki,[1] Hiroshi Doi,[1] Noriko Miyake,[1] Takahisa Furukawa,[3] Naomichi Matsumoto,[1,*] and Hirotomo Saitsu[1,*]

Microphthalmia with limb anomalies (MLA) is a rare autosomal-recessive disorder, presenting with anophthalmia or microphthalmia and hand and/or foot malformation. We mapped the MLA locus to 14q24 and successfully identified three homozygous (one nonsense and two splice site) mutations in the SPARC (secreted protein acidic and rich in cysteine)-related modular calcium binding 1 (*SMOC1*) in three families. *Smoc1* is expressed in the developing optic stalk, ventral optic cup, and limbs of mouse embryos. *Smoc1* null mice recapitulated MLA phenotypes, including aplasia or hypoplasia of optic nerves, hypoplastic fibula and bowed tibia, and syndactyly in limbs. A thinned and irregular ganglion cell layer and atrophy of the anteroventral part of the retina were also observed. Soft tissue syndactyly, resulting from inhibited apoptosis, was related to disturbed expression of genes involved in BMP signaling in the interdigital mesenchyme. Our findings indicate that SMOC1/Smoc1 is essential for ocular and limb development in both humans and mice.

Introduction

Microphthalmia with limb anomalies (MLA [MIM 206920]), also known as Waardenburg anophthalmia syndrome or ophthalmoacromelic syndrome, is a rare autosomal-recessive disorder first described by Waardenburg.[1] It is characterized by ocular anomalies ranging from mild microphthalmia to true anophthalmia and by limb anomalies such as oligodactyly, syndactyly, and synostosis of the 4th and 5th metacarpals.[2–4] The genetic cause for MLA has remained unknown.

It is widely known that secreted signaling molecules such as Sonic hedgehog (Shh), wingless-type MMTV integration site family (Wnt), transforming growth factor β (Tgf-β), bone morphogenetic proteins (Bmps), and fibroblast growth factor (Fgf) are involved in the development of many organs and tissues, including the eyes and limbs.[5,6] In particular, mutations in *BMP4* (MIM 112262) have resulted in anophthalmia with systemic manifestations, including polydactyly and/or syndactyly (also known as micropthalmia, syndromic 6, MCOPS6 [MIM 607932]),[7] highlighting importance of BMP signaling in both the developing eye and limb.

SMOC1 (MIM 608488), which encodes SPARC (secreted protein acidic and rich in cysteine)-related modular calcium binding 1, is a member of the SPARC (also known as BM-40) matricellular protein family that modulates cell-matrix interaction by binding to many cell-surface receptors, the extracellular matrix, growth factors, and cytokines.[8,9] SMOCs are extracellular glycoproteins with five domains: an N-terminal follistatin-like (FS) domain, two thyroglobulin-like (TY) domains, a domain unique to SMOC, and an extracellular calcium-binding (EC) domain.[9] SMOC1 is widely expressed in various tissues with localization to basement membranes.[9,10] Although the biological function of SMOC1 remains largely unknown, it has been recently reported that *Xenopus* smoc protein, the ortholog of human SMOC1, acts as a BMP antagonist,[11] suggesting that human SMOC1 can also modulate BMP signaling.

Here, we demonstrate that *SMOC1* mutations cause MLA. We also show that *Smoc1* null mice recapitulated

[1]Department of Human Genetics, Yokohama City University Graduate School of Medicine, 3-9 Fukuura, Kanazawa-ku, Yokohama 236-0004, Japan; [2]Department of Obstetrics and Gynecology, Yokohama City University Graduate School of Medicine, 3-9 Fukuura, Kanazawa-ku, Yokohama 236-0004, Japan; [3]Department of Developmental Biology, Osaka Bioscience Institute, 6-2-4 Furuedai, Suita, Osaka 565-0874, Japan; [4]Division of Pediatrics, Okinawa Prefectural Nanbu Medical Center & Children's Medical Center, 118-1 Ikyoku, Arakawa, Haebaru, Okinawa 901-1193, Japan; [5]Medical Genetics Unit, St. Joseph University, Beirut 1104-2020, Lebanon; [6]Department of Pediatrics, Ege University Faculty of Medicine, 35100 Bornova-Izmir, Turkey; [7]Department of Social and Environmental Medicine, Graduate School of Medicine, Osaka University, 2-2 Yamadaoka, Suita, Osaka 565-0871, Japan; [8]Center for Advanced Science and Innovation, Osaka University, 2-1 Yamadaoka, Suita, Osaka 565-0871, Japan; [9]Laboratory for Bone and Joint Disease, Center for Genomic Medicine, RIKEN, 4-6-1 Shirokanedai, Minato-ku, Tokyo 108-8639, Japan; [10]Laboratory Animal Facility, Research Center for Medical Sciences, Jikei University School of Medicine, 3-25-8, Nishi-Shimbashi, Minato-ku, Tokyo 105-8461, Japan; [11]Research Institute of Personalized Health Sciences, Health Sciences University of Hokkaido, Ishikari-Tobetsu, Hokkaido 061-0293, Japan; [12]Department of Human Genetics, Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences, Sakamoto 1-12-4, Nagasaki 852-8523, Japan; [13]Department of Medical Genetics, University of the Ryukyus Faculty of Medicine, 207 Uehara, Nishihara, Okinawa 903-0215, Japan
[14]These authors contributed equally to this work
[15]Current address: Laboratory of Biochemistry and Molecular Biology, National Cancer Institute, National Institutes of Health, Building 37, Room 6050, Bethesda, MD 20892, USA
*Correspondence: naomat@yokohama-cu.ac.jp (N.M.), hsaitsu@yokohama-cu.ac.jp (H.S.)
DOI 10.1016/j.ajhg.2010.11.012.

MLA phenotypes, indicating that *SMOC1* plays essential roles in both eye and limb development in humans and mice.

Subjects and Methods

Subjects

A total of four families with one or two cases of MLA were analyzed in this study, including three previously reported families (A, B, and C).[12,13] Family X from Turkey, which has been previously described,[14] was newly recruited to this study. Detailed clinical information of all the patients is available in the literature,[12,14] and phenotypes of patients with confirmed mutations are summarized in Table S1 (available online). A total of five affected and 16 unaffected members from the four families were analyzed in the linkage study. Genomic DNA was obtained from peripheral-blood leukocytes with the use of QuickGene 610-L (Fujifilm, Tokyo, Japan) after informed consent had been given. Experimental protocols were approved by the institutional review board of Yokohama City University School of Medicine.

SNP Genotyping, and Fine Mapping with Short Tandem Repeat Markers

Whole-genome SNP genotyping, with the use of GeneChip Human Mapping 50K Array XbaI (Affymetrix, Santa Clara, CA), and fine mapping of possible candidate regions, with the use of additional microsatellite markers, were performed as previously described.[12,15] The list of primers used for fine mapping is presented in Table S2.

Linkage Analysis

Multipoint linkage analyses using aligned SNPs were performed with ALLEGRO software.[16] Two-point linkage analyses of candidate regions were performed with the LINKAGE package MLINK (FASTLINK software, version 5.1). In each program, an autosomal-recessive model of inheritance with complete penetrance and a disease-allele frequency of 0.001 were applied.

Mutation Analysis of Candidate Genes

All coding exons and exon-intron boundaries of *RAD51L1* (MIM 602948), *ACTN1* (MIM 102575), *ERH* (MIM 601191), *SRSF5* (MIM 600914), *DCAF5* (MIM 603812), *COX16*, *EXD2*, *GALNTL1*, *SLC39A9*, *KIAA0247*, *MED6* (MIM 602984), *TTC9* (MIM 610488), *MAP3K9* (MIM 600136), and *SMOC1* (transcript variant 1, GenBank accession number NM_001034852.1) were analyzed in the probands of families A, C, and X. The transcript variant 2 of *SMOC1* (GenBank accession number NM_022137.4) is 3 bp shorter than the variant 1, leading to an in-frame amino acid deletion at position 431. PCR was cycled 35 times at 94°C for 30 s, at 60°C for 30 s, and at 72°C for 30–90 s in a total volume of 20 μl containing 30 ng genomic DNA as a template, 0.5 μM forward and reverse primers, 200 μM each deoxyribonucleotide triphosphate (dNTP), 1 × ExTaq buffer, and 0.25 U ExTaq (Takara). All primers were designed with Primer3 software. Detailed information of primers is available upon request. PCR products were purified with ExoSAP (USB) and sequenced with BigDye Terminator 3.1 (Applied Biosystems) on a 3100 Genetic Analyzer. Sequences of patients were compared to reference genome sequences in the UCSC Genome Browser (February 2009 assembly) with Seqscape software, version 2.1 (Applied Biosystems).

Animals

Smoc1 mutant mice, created with the use of the *Sleeping Beauty* transposon system, have been previously described.[17] Line PV384 was provided by the RIKEN BioResource Center through the National BioResource Project of MEXT, Japan. Three independent mouse lines (no. 1 to no. 3), each with a single insertion in intron 1 of *Smoc1*, were bred as heterozygotes. Lines 1 and 3 were backcrossed for at least four generations to a C57BL/6J background. Line 2 was maintained with a mixed background of C57BL/6J and ICR. We mainly analyzed line 1, but we confirmed similar phenotypes in lines 2 and 3. Animals were housed in accordance with protocols approved by the Institutional Animal Care and Use Committee at Yokohama City University, School of Medicine. PCR genotyping of mice was performed with the use of genomic DNA from yolk-sac, ear, or tail biopsies. The following primers were used: PV384-WF, 5′-AAAGGCTGGGAATTGTTTG A-3′; PV384-WR, 5′-TGCAGCTGAAACTGTCTCTCC-3′; PV384-MF, 5′-TGTCCTAACTGACTTGCCAAA-3′. The PV384-WF/PV384-WR primers amplified a 441 bp wild-type (WT) product, and the PV384-MF/PV384-WR primers amplified a 218 bp mutant product.

Southern Hybridization

Genomic DNA was extracted from livers or tail biopsies of PV384 heterozygous (*Smoc1*$^{Tp/+}$) mice via standard protocols. The gene-trap insertions were analyzed by Southern hybridization with the use of 10 μg of *Sac*I-, *Nde*I-, BglII-, and *Eco*RI-digested DNA. The probe (451 bp), which hybridized to the internal ribosome entry site (IRES) in the gene-trap vector, was synthesized with the DIG PCR Probe Synthesis Kit (Roche) with the use of the following primers: 5′-CTAACGTTACTGGCCGAAGC-3′ and 5′-CCCAGATCAGATCCCATACAA-3′. Hybridization, washing, and detection of probes were performed according to the manufacturer's protocol. Images were captured with the FluorChem system (Alpha Innotech).

Cloning of Gene-Trap Insertion Sites

After identification of aberrant DNA fragments by Southern hybridization, *Nde*I-, *Sac*I-, and *Eco*RI-digested DNA from PV384 mice was fractionated by electrophoresis, and appropriately sized fragments containing *Ol1* (*other locus 1*), *Ol2*, and *Ol3* were isolated with a QIAEXII Gel Extraction Kit (QIAGEN). The isolated DNA was self-ligated by Ligation High ver.2 (Toyobo), precipitated with ethanol, and dissolved in 20 μl EB buffer (QIAGEN). Inverse PCR was performed in 25 μl reactions, containing 2 μl ligated DNA, 1 × PCR buffer for KOD FX, 0.4 mM each dNTP, 0.5 μM each primer, and 0.5 U KOD FX DNA polymerase (Toyobo). Primers common to *Ol1*, *Ol2*, and *Ol3* were as follows: Inv-F, 5′- AT CGCCAGTTCTGTATGAACGGTCTGGTCTT-3′; Inv-R, 5′-CCCTC TTTACGTGCCAGCCATCTTAGAGATAC-3′. Confirmatory PCR of gene-trap insertion sites for *Ol1*, *Ol2*, and *Ol3* loci was performed with the use of the following primers: *Ol1*-F, 5′-GAGTGGTATTCA TTGGATTCTGCTGAT-3′; *Ol2*-F, 5′-AAATCCAGCTGGCCAACAGA CTAAG-3′; *Ol3*-F, 5′-TTGCCGGGTAGACTCTATCAAGAACCA-3′; TBAL-R, 5′-CTTGTGTCATGCACAAAGTAGATGTCC-3′. Primer sets of *Ol1*-F/TBAL-R, *Ol2*-F/TBAL-R, and *Ol3*-F/TBAL-R could amplify 175 bp, 607 bp, and 767 bp products, respectively. These PCR primer pairs were also used for genotyping of mice harboring a single insertion at the *Smoc1* locus.

Confirmation of Promoter- and Poly(A)-Trapped Transcripts

Whole embryos at embryonic day 10.5 (E10.5) and E11.5 were stored in RNAlater solution (QIAGEN). Total RNA was extracted from WT, *Smoc1*$^{Tp/+}$, and *Smoc1*$^{Tp/Tp}$ embryos with the use of RNeasy Plus Mini (QIAGEN). One microgram total RNA was subjected to reverse transcription with the use of a PrimeScript 1st Strand Synthesis Kit with random hexamers (Takara). A control reaction with no reverse transcriptase was included in each experiment. PCR was performed in 20 μl reactions, containing 1 μl cDNA, 1 × PCR Buffer for KOD FX, 0.4 mM each dNTP, 0.3 μM each primer, and 0.4 U KOD FX (Toyobo). Primers used are listed below: *Smoc1*-F, 5′-GTCCCCACCTCCCCAAGTGCTTTGA-3′; *LacZ*-R, 5′-TGCCAAAAGACGGCAATATGGTGGAAA-3′; *GFP*-F, 5′-TCACATGGTCCTGCTGGAGTTCGTGAC-3′; *Smoc1*-R, 5′-ACACTTGCTCTGGCCAGCATCTTTGCAT-3′. Primer sets of *Smoc1*-F/*Smoc1*-R, *Smoc1*-F/*LacZ*-R, and *GFP*-F/*Smoc1*-R could amplify native *Smoc1* (366 bp), promoter-trapped transcripts (Tp-LacZ, 500 bp) and poly(A)-trapped transcripts (Tp-GFP, 308 bp), respectively. The PCR conditions were 98°C for 10 s, 68°C for 1 min, for 30 cycles. Primers for *ACTB*[18] were used as an internal control. PCR for *ACTB* was cycled 20 times at 94°C for 20 s, 60°C for 20 s, and 72°C for 30 s in a total volume of 10 μl containing 0.5 μl cDNA, 0.4 μM each primer, 0.2 mM each dNTP, 1 × ExTaq buffer, and 0.5 U ExTaq HS (Takara). All PCR products were electrophoresed on 2% agarose gels.

In Situ Hybridization

Embryos were collected between E9.5 and E13.5. Whole-mount in situ hybridization was carried out as previously described.[19,20] Two fragments of *Smoc1* cDNA were obtained as probes by RT-PCR, with the use of total RNA extracted from livers of E16.5 mouse embryos, and subcloned into pCR4-TOPO (Invitrogen). Primer sequences were as follows: probe 1-F, 5′-GTCTGCTCACGCCCCACT-3′; probe 1-R, 5′-CCTGAACCATGTCTGTGGTG-3′; probe P-F, 5′-CAGGAACAGGAAAGGGAAGA-3′; probe P-R, 5′-AAGGGAAAACCACACAGCAC-3′. PCR products were 1023 bp and 1578 bp, corresponding to nucleotide positions 275–1297 and 1849–3426 of the mouse *Smoc1* cDNA (GenBank accession number NM_001146217.1), respectively. The cDNA fragment amplified with probe P-F and probe P-R primers was identical to the probe used in a previous report.[21] Digoxigenin-labeled sense and antisense riboprobes were synthesized with the use of a digoxigenin RNA labeling kit (Roche). These two different antisense probes demonstrated identical staining patterns, and the control sense probes showed no staining. The expression pattern was confirmed with more than three embryos. In addition, the following probes were used: *Bmp2* (gift from Y. Takahashi),[22] *Sox9* (gift from A. Yamada),[22] *Bmp7* (gift from E.J. Robertson), and *Msx2* (gift from Dr. R.E. Maxson, Jr). The numbers of embryos examined were as follows (numerical quantity for WT, *Smoc1*$^{Tp/+}$, and *Smoc1*$^{Tp/Tp}$, respectively, shown in parentheses): *Msx2* (2, 1, 3) at E11.5; *Bmp2* (3, 0, 3), *Bmp7* (3, 0, 3), *Msx2* (3, 0, 3), and *Sox9* (2, 1, 3) at E12.5; *Bmp2* (1, 2, 3), *Bmp7* (2, 1, 3), *Msx2* (1, 2, 3), and *Sox9* (1, 3, 4) at E13.5. Stained embryos were cleared in glycerol to enable images to be produced with a VHX-1000 digital microscope (Keyence).

Histology

Heads of embryos and newborns were fixed overnight in 4% paraformaldehyde in PBS at 4°C. These embryos were then washed in PBS. Frozen samples were serially sectioned at 16 μm (E14.5) and 20 μm (P0). The numbers of eyes examined (WT, *Smoc1*$^{Tp/+}$, *Smoc1*$^{Tp/Tp}$) were as follows: coronally sectioned at E14.5 (8, 10, 12), coronally sectioned at P0 (8, 10, 6), horizontally sectioned at P0 (2, 2, 4). For evaluation of ventral atrophy of the retina, only the coronally sectioned eyes were used. TB staining was performed according to standard protocols. Forelimbs of mice were fixed in 4% paraformaldehyde in PBS, decalcified in 10% EDTA, and embedded in paraffin. Forelimbs were serially sectioned at 4 μm and stained with hematoxylin and eosin.

Evaluation of Optic Nerve Diameter

The palatine and orbital bones were carefully removed to expose the optic chiasm and optic nerve. During the dissection process, 4% paraformaldehyde in PBS was frequently applied onto the gaps between the bone and optic nerve. Xylene cyanol was applied to enhance the outline of optic nerves at poastnatal day 0 (P0). Photographs of optic nerves were taken with a VHX-1000 digital microscope, and the diameter was measured for right and left optic nerves with the bundled software included with the VHX-1000 instrument.

Skeletal Staining

For skeletal preparations, mice were fixed in 99.5% ethanol after removal of the skin and viscera. Cartilage tissues were stained with 0.015% alcian blue and 20% acetic acid in 75% ethanol for three days at 37°C. After dehydration with 99.5% ethanol for three days, bones were stained with 0.002% alizarin red in 1% KOH. Then skeletons were cleared in 1% KOH for several weeks. For P14 mice, soft tissues were dissolved in 2% KOH before alizarin red staining.

Nile Blue Staining

For the study of apoptosis of hindlimbs at E13.5 and E14.5, Nile blue (NB) staining was performed on the basis of a previously described protocol,[23] except that staining was performed at 37°C (not room temperature). Apoptosis was determined by NB-stained (deceased) cells. After rinsing in Tyrode solution, hindlimbs of control (WT and heterozygous littermates) and homozygous mice were evaluated. Photographs of dorsal aspects were taken with a VHX-1000 digital microscope. Experiments were repeated three times, and reproducible representative results are presented.

Statistical Analysis

Statistical analyses were performed with the use of non-repeated-measures ANOVA followed by Dunnett's post hoc test. The results are given as mean ± standard deviation, and the threshold p value for statistical significance was 0.01.

Results

Identification of Homozygous *SMOC1* Mutations

We have previously mapped the MLA locus to a 422 kb region at 10p11.23 by analyzing three families (one Japanese family [A] and two Lebanese families [B and C]). This region contained only one gene, *MPP7*, in which no mutations were found.[12] After a new Turkish family (X) was added to the analysis, the MLA locus was again searched by homozygosity mapping to the consanguineous families (X, B, and C) and haplotype mapping to family A for detection of compound-heterozygous mutations; however, we could not detect any common regions

among the four families. We then focused on identifying common regions in any three of the four families to allow for locus heterogeneity (Table S3).

A locus at 14q24.1-q24.2, which showed the highest LOD score (3.936) among the candidate regions larger than 2.0 Mb, was highlighted among families A, C, and X. This locus was analyzed with the use of additional microsatellite markers, and a 3.0 Mb region containing 24 genes was identified (Figures 1A and 1B). A total of 14 genes were sequenced, and homozygous mutations were found in *SMOC1*: c.718C>T (p.Gln240X) in family A, c.664+1G>A in family C, and c.378+1G>A in family X (Figures 1C and 1D). All of these homozygous mutations were cosegregated with the disease phenotype, and the parents of the individuals with these mutations were heterozygous carriers (Figure 1C). We could not find any mutations in *SMOC1* in family B, in which MLA is unlinked to the 14q24.1-q24.2 locus. Interestingly, in family A haplotypes of paternal and maternal alleles, each having the same mutation, are completely different (data not shown), suggesting that the same mutation may have occurred in separate events. The c.718C>T mutation was not detected in 289 healthy Japanese controls, including 100 Okinawa islanders. The other two mutations were not detected in ethnically matched controls (54 Lebanese and 99 Turkish subjects, respectively), nor in 289 Japanese controls. The two splice-donor-site mutations (c.664+1G>A and c.378+1G>A) are predicted to abolish a donor site, as predicted by ESE-finder, NetGene2, HSF2.4.1, SpliceView, and BDGP analysis (Table S4). Thus, the three mutations are likely to lead to a loss of functional SMOC1.

Smoc1 Expression in the Developing Eye and Limb in Mice

For the examination of *Smoc1* expression in the developing eye and limb, whole-mount in situ hybridization of mouse embryos was performed. *Smoc1* was expressed in the forebrain, midbrain, hindbrain, pharyngeal arch, somites, and forelimb buds at E9.5 (Figure 2A). At E10.5, *Smoc1* expression was observed in the optic stalk (Figure 2B), and at E11.5, expression was localized to the closure site of the optic cup (Figure 2C). Expression of *Smoc1* in developing limbs between E10.5 and E11.5 was observed in both dorsal and ventral regions, with a broader pattern of expression in dorsal regions, but expression was not detected in the most anterior, posterior, and distal parts of limb buds (Figures 2D and 2E). Expression coinciding with chondrogenic condensation was observed at E12.5 (Figure 2F), and expression then became restricted to future synovial joint regions at E13.5 (Figure 2G). This dynamic expression suggests that *Smoc1* plays a critical role in ocular and limb development.

Ocular and Limb Anomalies in *Smoc1* Null Mice

To investigate the pathological basis of MLA due to the loss of *SMOC1* function, we obtained *Smoc1* mutant mice, PV384.[17] PV384 mice possess gene-trap insertions in the *Smoc1* locus and in three other loci. After PV384 mice were bred with C57BL/6J or ICR mice, we obtained three independent lines (no. 1 to no. 3), each with a sole insertion in intron 1 of *Smoc1* (Figure S1). We mainly analyzed line 1, but we confirmed similar phenotypes in lines 2 and 3. Heterozygous mutant mice ($Smoc1^{Tp/+}$) were healthy and fertile. Homozygous mice ($Smoc1^{Tp/Tp}$) were null mutants, as they showed no native transcript of *Smoc1* (Figure S1E). Homozygous mice were viable at P0; however, they did not survive beyond the first 3 wks of life (Figure 3B). Their growth was retarded in comparison to WT and heterozygous littermates at P0 and P14 (Figures 3A and 3C). Developmental defects in eyes and optic nerves were evident at E14.5. Homozygous mice had relatively small eyes, and histological examinations revealed aplasia or hypoplasia of optic nerves (in 10 of 12 optic nerves), atrophy of the anteroventral part of the retina (in 11 of 12 eyes), and extension of the retinal pigmented epithelium (RPE) to the optic nerve (in 10 of 12 eyes) (Figures 3D–3I). These abnormalities were also observed at P0 (aplasia or hypoplasia of optic nerves [in 7 of 10 optic nerves], retinal atrophy [in 6 of 6 eyes], and RPE extension [in 3 of 6 eyes with identifiable optic nerves]) (Figures 3J–3M). WT or heterozygous littermates did not show any such abnormalities, except that a few eyes of heterozygous mice showed extension of the RPE at E14.5, but not at P0 (in 2 of 10 and 0 of 12 eyes, respectively). Toluidine blue (TB) staining showed ganglion cell layers that were thinned and irregular to varying degrees in homozygous mice, suggesting a reduced number of retinal ganglion cells (Figures 3J–3K′). Thus, *Smoc1* is required for axon sprouting, elongation, or maintenance of retinal ganglion cells.[24] Hypoplasia of optic nerves was further quantitatively confirmed by macroscopic examination: the average diameter of optic nerves of homozygous mice was significantly smaller than that of WT and heterozygous littermates at P0 and P14 (Figures 3L–3Q). These data clearly demonstrate that loss of *Smoc1* in mice affects development of the body, retina, and optic nerves, in a manner similar to that seen in MLA patients.[3,4]

Newborn homozygous mice could be readily identified by their hindlimb syndactyly and pes valgus, whereas no abnormalities were observed in WT and heterozygous pups (Figure 4 and Table 1). Interestingly, the severity of syndactyly varied between mouse lines: line 1 exclusively showed soft tissue syndactyly, whereas line 2 frequently showed four digits (Figures 4F and 4J). Skeletal preparations with alcian blue and alizarin red revealed that the foot with four digits had four phalanx and five metatarsals with fusion to each other (Figure 4K). Thus the *Smoc1* null mutation resulted in a spectrum of phenotypes, from soft tissue syndactyly to four fused digits, probably due to different genetic backgrounds. Bowed tibiae and hypoplastic fibulae were also consistently observed in homozygous mice (Figures 4H and 4L). The articulation between